

自己表象の文化人類学：スロヴァキアにおける民主 化後の文化人類学の模索

神原, ゆうこ
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2338959>

出版情報：九州人類学会報. 31, pp.20-26, 2004-07-17. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

自己表象の文化人類学

—スロヴァキアにおける民主化後の文化人類学の模索—

神原ゆうこ

(九州大学大学院)

序

文化人類学の歴史を辿ると、一つの起源として植民地の異民族の文化への興味が挙げられる。宣教師の記録などに基づいた文化論に始まり、後にマリノフスキーらによって現地調査に基づく近代人類学が成立した。しかし、これとは別にもう一つ、文化人類学の起源としてドイツを中心としたロマン主義的ナショナリズム運動が挙げられる。中央ヨーロッパの国々ではロマン主義の影響を受けた民族復興運動がその地における現代人類学の大きな源となっている。その運動における熱狂的な愛国者兼学者の主要な目的は現在を作り直し、未来を建設してゆくための「歴史的」モデルを発見することにあった [ウィルソン 1973 [1996]: 158]。

したがって中央ヨーロッパに位置するスロヴァキアの文化人類学は、植民地の異民族の研究に始めるアメリカやイギリスのものとも、また日本の文化人類学とも異なる様相を呈している。スロヴァキアにおける文化人類学の基本は自文化の探求と表象である。しかしながらスロヴァキアをはじめとした旧社会主義諸国の場合はさらに、80年代後半の民主化という大きな政治転換の影響を考慮する必要がある。この変化によって西側からの情報の流入と表現の自由がもたらされたことや西側の研究者との交流が可能になったことなどが、文化人類学および学問全体の方向性を変えた。とはいえ、このような背景の違いがあるにもかかわらず、同じ「文化人類学」の名を冠する他の国で行われている学問と基礎概念などは共有している。

自己を対象とする文化人類学と他者を対象とする文化人類学は、過去においては独立したものであったかもしれないが、現在においては接合する部分も多い。それぞれの国により文化人類学の研究動向や方法論などの詳細には差異があるが、それはその国における歴史的な背景、ナショナルな文化の捉えられ方や少数民族への対応など政治的

な状況に負っている。その意味では自己を対象とするスロヴァキアの文化人類学も国内での文脈における政治性から逃れることができない。この論文では、欧米とは異なる背景を持ち、他者でなく自己を対象とするスロヴァキア文化人類学の特性を分析することで、文化人類学の広がりの可能性を検討する。とりわけ、学会誌の研究動向および大学文化人類学教育の分析から、民主化以後の政治的に不安定な状況にあるなかで、文化人類学が学問としての客観性を意識しつつもどのように自文化と対峙してきたかに焦点をあてる。そのなかで非欧米の文化人類学の視点を新たな文化人類学の視野として検討したい。

スロヴァキアにおいて文化人類学にあたる学問を示す言葉は、*národopis* (ナーロドピス・民俗学)、*etnológia* (エトノローギア・民族学)、*kultúrna antropológia* (クルトゥールナ アントロポローギア・文化人類学) と3種類ある。これらは曖昧ではあるが使い分けされている。*Národopis* は正確には民俗誌の意味を持ち、自民族文化の「記録」のニュアンスを含み、*Etnológia* は自文化を研究する「学問」として使用されている。英語の *folklore* にあたる単語 *folklór* (フォルクロール) も存在するが、スロヴァキアにおいては多くの場合、民謡や民族舞踊等の民俗芸能に限定して使用され、民族芸能研究については *folkloristika* (フォルクロリスティカ) という単語が用いられる。文化人類学 (*Kultúrna antropológia*) は最近になってから使われ始めた言葉である。民族学 (*Etnológia*) と文化人類学 (*kultúrna antropológia*) の相違点は、しばしば曖昧にはされているが¹⁾、民族学が民族を対象にした文化研究であるのに対し、文化人類学は民族という枠にとらわれずに人あるいは集団を対象にした文化研究という定義 [Kiliánová 2002b: 284] が現状に即した妥当なものと考えられる²⁾。

I. 自文化の探求と表象

I-1 スロヴァキア文化人類学の射程

スロヴァキアにおける文化人類学成立のきっかけは、18世紀末から19世紀にかけて中東欧地域で広がった民族復興運動である。この時期に知識人を中心に文章語としてのスロヴァキア語が模索され、その一方でシャファリークらにより民話や民謡の収集が行われるなど、民俗文化も注目された。彼らはスロヴァキアに民族の文化と言語の意識を与えることに貢献した [Kirschbaum 1995: 91]。1863年には民族文化団体のマティツァ・スロヴェンスカー (Matica slovenská) も成立した。このときには既にいくつかのスロヴァキア民俗誌も作成されており、これらの民俗誌を作成する組織によって、初めての全スロヴァキア的な組織が設立したのである [Michálek 1998: 115]。このようなスロヴァキアの自文化への興味がスロヴァキアにおける文化人類学の土台となった。スロヴァキアの文化人類学雑誌である「スロヴェンスキー・ナードピス」(Slovenský Národopis、以下 SN) は1953年に発刊された。当初の SN はスロヴァキア国内の「伝統的」な習慣、衣食住、民謡、信仰など地域ごとの民俗文化の記述が中心であったが、80年代頃から、その「伝統」的な生活と現代における実生活の差異が注目されるようになった。文化のイノベーション、等に着目した論文が新傾向として目立つようになった。

90年代に入ってから、以降は SN に掲載された論文のテーマも大きく変化した。民族やアイデンティティに関する問題、文化人類学の方法論、都市における文化人類学的研究 [Klíánová 2002b] さらに歴史研究の文化人類学への導入、文化や象徴の解釈や分析などの研究が目立つようになった。さらに90年代後半から現在にかけてはオーラルヒストリーや現代の神話などに関する研究が新たに加わった。SN は新しい社会体制の始まりに付随する学問的可能性にすばやく反応したのである [Šrámková 2003: 226]。その具体的な原因としては、民主化によって学問への政治的な圧力がなくなったこと、西ヨーロッパの文化人類学研究が大きな影響を与えるようになったことが考えられる⁵⁾。1990年に Leščák がスロヴァキアの人類学者に行ったアンケート⁶⁾の結果から導き出された民主化後のスロヴァキア文化人類学に必

要とされる研究テーマは、中欧の文脈におけるスロヴァキア文化／人と自然の共生に関する民族学的研究／中欧地域の民族誌／スロヴァキア国内の少数民族／スロヴァキアにおける倫理観や美的感覚／社会集団や非公式団体に関する民族学的研究／現代における家族の生活／などであり [Leščák 1991: 75-76]、文化圏としての中欧への注目や社会人類学的研究も注目されたテーマであったといえる。

ただし、既に民主化前の80年代から「伝統」を発掘し保存するサルベージ的な文化人類学は限界を示し始めており、文化人類学の新たな道の模索は必要であった。「古くからの伝統的」な民俗を記述することから、現代における村落の民俗文化の変容や都市住民の民族的なメンタリティなどへと対象を移行させたり、民俗文化を再解釈したりするなどして文化人類学はその研究視野を広げようとしていた。スロヴァキア側に西側の影響を受け入れる土台があったことに留意したい。

89年以前以後を通して研究の対象の中心が自文化にあることは共通している。近隣民族との比較あるいはスロヴァキア移民や国内の異民族の研究(ユダヤ、ロマ、ドイツ、ハンガリーなど)も行われているが、スロヴァキア国内のスロヴァキア民族に関する研究が圧倒的に多い。

I-2 フィールドからの文化の表象と発信

自文化を研究対象とするスロヴァキアの文化人類学において、folklor (民俗芸能) 研究は一つの重要な研究分野として確立している。スロヴァキアでは結婚式など祝いの場や年中行事に際する民族舞踊や民謡がそれぞれの地方ごとに数多く存在する。現在スロヴァキアにはそれぞれの地域ごとの民族舞踊や民謡を披露する多くの民族舞踊団が存在し、夏には各地で民族舞踊フェスティバルが開催される。人類学者にとって民族舞踊団とフェスティバルはその村の伝統行事の保存と再現の場として注目されている。

しかし、このような状況においては、年配者以外に舞踊団関係者がその村の民俗文化について詳しくなり、時には「伝統的」な文化を実践する実質的な担い手となる⁵⁾。スロヴァキアの人類学調査においては、インフォーマントの現在の状況ではなく伝統的な生活を紹介する「準備された」答えに注意することが指摘される⁶⁾。またその一方

で、都市部の舞踊団は踊りや衣装にアレンジを加えて、芸術性を高めようとしたり、スロヴァキアの劇や文学などがしばしばスロヴァキア民俗から着想を得て創作されたりなど、ハイカルチャーへのフォークロア主義も浸透している。民俗芸能研究者にとって、このようなフォークロア主義は避けることのできない問題であり、このような現代の民俗芸能も人類学の研究対象に含まれる。

民俗芸能はハイカルチャーに取り込まれた際、スロヴァキア性を象徴するものとして用いられる。スロヴァキアの民族衣装、歌、ダンスのディテールはスロヴァキア文化（あるいは各地方）の目に見える形で表現されるアイデンティティである。その点において、フォークロリズムはしばしばナショナリズムとも結びつくことが指摘されている [Krekovičová 1999]。

II. 民主化が文化人類学に与えた影響

II-1 スロヴァキアの文化的位置づけの変化

—スラヴから中欧へ—

スロヴァキア文化人類学は自文化の探求と表象を主な目的としているが、その探求と表象の視点は柔軟性があり、「伝統」の発掘と保存ではなく、現代の文化の流動性が中心的なテーマとなっている。しかし、もうひとつスロヴァキアの民族や文化を他者との歴史的、文化的関係性のなかで位置付けることもスロヴァキアの文化人類学の機能に含まれる。

スロヴァキア人は分類上西スラヴ族に属し、民族復興運動期の活動家には汎スラヴ主義者も含まれていたこと、さらに社会主義時代の政治的な理由から、スロヴァキアの文化はスラヴのなかに位置付けられていた。スロヴァキアのコメニウス大学民族学学科はスラヴ人類学の一拠点として雑誌「Etonologia Slavica」⁷⁾の1969年から出版を始めており、執筆者もチェコスロヴァキアの学者に限らず、ソ連、ポーランド、ユーゴスラヴィア、ブルガリアなど広くスラヴ圏の学者が参加していた⁸⁾ [Podolák 1993: 8]。研究活動においても文化圏としてのスラヴは重要であった。

89年の体制転換以降、スロヴァキアの文化をスラヴでなく中欧としてのコンテキストで読みかえようとする動きが顕著になった。スロヴァキアに限らず中央ヨーロッパの民族は、近隣諸民族との

文化的な関係性を否定することはできないほど、深く相互に影響を与え合っている。確かに、スロヴァキアを中欧へ位置付けることは、第二次世界大戦以前のドイツ語圏との結びつきの強さを歴史的、文化的に鑑みれば根拠あることである。もちろん、現在においても、スラヴのなかでの位置付けは否定されてはいない。ただし、民主化以降新たにヨーロッパのなかにスロヴァキアを位置付ける研究は非常に活発に行われている。1994年から1996年にかけてスロヴァキア民族学アカデミーでは「民族間の関係性における民俗文化の伝統：ヨーロッパ文化地域研究の視点から」というプロジェクトが生まれ、ヨーロッパというより広い視点からスロヴァキアの民俗文化の意味が問直された [Stoličná 1994: 402]。スロヴァキアの文化は西ヨーロッパの文化と起源は同じであり、スロヴァキアは民俗文化の古い形とキリスト教を保持している。また、ヨーロッパの地域は地理的、文化的な意味で絶えず変化を続けてきており、西のラテン文化から東のビザンツ文化まで全てが影響を与えあっている [ibid: 411, Stoličná 2000: 12] という考えがその根底にはある。

しかし、この位置付けにそれまで政治的にスラヴに所属することが強調された反動や、EUへの統合が意識されていることを否定することもできない。「『新』ヨーロッパ形成において、各民族の民俗文化はヨーロッパとしてのアイデンティティに統合され、ヨーロッパ文化の基礎となる [Stoličná 2000: 7]」という考えはスロヴァキアとヨーロッパとの文化的結びつきを強く主張している。政治経済的な存在であるはずのEUは文化的な「ヨーロッパ性」を保証する存在と捉えられている。

II-2 欧米文化人類学の問題系の受容

これまで、89年以降のスロヴァキア文化人類学の変化について、研究論文のテーマなどにおける欧米の文化人類学からの影響について述べてきたが、ここではさらに欧米で論じられた問題系のスロヴァキアにおける受容について触れたい。というのも、一部の問題系、とりわけ植民地の他者を研究することに始まった欧米の文化人類学特有のものは、自文化を探求するスロヴァキア文化人類学が置かれている状況とかけ離れたものであるからである。ただし、ここで注意したいのはヨーロッ

パ自体全ての国の人類学が「他者」を研究してきたわけではなく、スロヴァキアのように自民族を研究してきた人類学も多いことである。ドイツ語圏とスカンジナビア諸国の人類学も自民族の研究が中心であり、スロヴァキアの人類学者はこれらの国々における研究の影響も併せて受けている。欧米特有の議論に関しては、取り巻く状況の相違を認識した上で、それぞれの文脈に沿って解釈して取り入れられている。

欧米文化人類学の植民地主義性への批判は、スロヴァキアにおいては自民族を研究するスロヴァキア文化人類学を正当化することになったが、その一方で「他者」を研究してきた欧米文化人類学の理論や方法論を「自己」の研究に取り入れることが試みられた [Klíánová 2002a:52]。個々の民俗文化の解釈や象徴の分析に重点が置かれる研究はその一例である。またヨーロッパ研究を調査対象とする欧米人類学特有の問題ともいえるオリエンタリズムを巡る議論については、ロマやユダヤ研究に関してオリエンタリズムと同様の偏見と権力構造が存在することへの指摘へと応用された [Lukšová 2000]。

III. 大学教育にみるスロヴァキア人類学の現在

III-1 スロヴァキアの大学における文化人類学

これまで一般的な研究動向について論じてきたが、この章では具体的に大学における文化人類学教育を取り上げ、スロヴァキア人類学の現状を分析する。

まず、はじめにスロヴァキアの大学における文化人類学の扱いの変遷について簡単に触れたい。1921年コメニウス大学の哲学部に民俗学の授業およびゼミナールが導入されたのがスロヴァキアの大学における文化人類学の始まりである。当初は歴史学に関連して文化人類学が学ばれていたが、後に考古学と共に1960年に考古学・民族学科として、初めて文化人類学の名称を冠した学科が設立した。1968年に民族学・民俗芸能学科に改編・改名され、1992年には民族学・宗教学科、さらに改称され現在の民族学・文化人類学科に至る [Horvátová 1995: 19 ; Michálek 1998: 124]。このような学科名の改称はスロヴァキアにおける文化人類学が何をターゲットとしてきたか示している。

スロヴァキアに限らず、文化人類学は考古学、

宗教学、社会学、歴史学など他の学問と重なる部分が多い。スロヴァキアにおいては、とりわけスラヴ研究に関しては考古学、言語学との結びつきが重要視され、宗教学は、サルベージ人類学からの脱却の意図も込めて、文化事象の分析や解釈のために注目された。また都市を対象とする文化人類学に関しては、社会学の理論や、量的調査の導入も図られている。

文化人類学を学ぶことのできる大学はスロヴァキア国内では他に2校ある。しかしながら、人類学関係書籍の出版の活発さや、研究拠点であるスロヴァキア民族学アカデミーとの密接な連携がある点から、事実上、スロヴァキアの文化人類学教育の拠点はコメニウス大学の民族学・文化人類学科となっている。

III-2 現在の大学の教育カリキュラムと研究

III-2-1 大学教育カリキュラム

スロヴァキアの大学の学部課程は5年一貫の修士課程と3年制の学士課程の2種類ある。しかし、実質的に学士課程は短大のような位置に置かれており、文化人類学を学ぶ場合、5年制の修士課程に在籍する必要がある。

ここでは具体的にコメニウス大学の文化人類学のカリキュラムを例として参照する。1年次では主にスロヴァキアの「伝統的」な民族文化についてとフィールドワークに関する調査方法論を学ぶ。2年次と3年次の授業はヨーロッパおよびスラヴの文化人類学、及び文化人類学の理論が中心となる。4年次はその応用として、隣接学問である社会学や宗教学の授業が加わり、5年次で論文を執筆する。

コメニウス大学の文化人類学において重要視されているのはスロヴァキアの民俗文化である。1年次の授業で扱うスロヴァキアに関する民俗誌的な知識は、大学における文化人類学の基礎とされる。その後の学年ではスロヴァキアの民俗文化の知識を基本に文化人類学の理論を学習する。直接スロヴァキアとは関係のない文化人類学の学説史の授業なども存在するが、スロヴァキアの民俗について家族や建築などテーマ別に掘り下げた授業や、文化人類学の理論の授業であっても、スロヴァキア民俗文化と関連させて提示する授業も多い。

また、2年次ではポーランド語かブルガリア語かスロベニア語⁹⁾のいずれか一つのスラヴ語が選

択必修科目となっている。その他の外国語の履修に指定はないが多くの学生が英語かドイツ語を履修する。スロヴァキアの文化人類学の学習において文献購読のために必要とされる外国語はまずチェコ語¹⁰⁾と英語であり、次にドイツ語とポーランド語である¹¹⁾。ロシア語は現在では特に必要とされない。

さらに特質すべき点は、博物館学が必修となっていることである。2年次に行われるフィールドワークは実質的には博物館実習である。スロヴァキアには各地方に多くの民俗博物館であり、文化人類学の修士課程卒業者が学芸員として働くことが多い。この点から文化人類学者が自文化のエキスパートとしての役割を求められていることが示される。

III-2-2 学生の研究にみる近年の研究動向

教育カリキュラムは自文化のエキスパートの育成を目指したものとなっているが、実際のところ、卒業後一部は博物館に勤務し、一部は博士課程¹²⁾に進学するが、全く違う仕事に就く学生も多い。

学生の修士論文のテーマ¹³⁾も現在では多岐に渡り、現在のスロヴァキアを研究対象にジェンダーやツーリズム、エスニックアイデンティティの問題が近年の傾向として目立つ。学生の修士論文も90年代前半までは、基本的に特定の村落で特定の事象についての調査が中心であったが、それ以降は地域性の高い論文からテーマ性の高い論文へと傾向は変化した。90年代は特に学科が民族学・宗教学であったこともありキリスト教と民俗の接合、民俗に付随する象徴の解釈をテーマにした論文が多かった。

近年の傾向としてもうひとつ、スロヴァキア以外を研究対象とする論文が増えてきたことが挙げられる。スロヴァキア内のロマ、ハンガリー人の研究に加えて、1999年にはスロヴァキア国内のムスリム移民を研究した論文が提出されている。中欧からバルカンにかけては広く、スロヴァキア移民がおりその研究の場合もあるが、ブルガリアやルーマニアに調査に行く学生も少なからず存在する。この背景には物価の格差（ブルガリア、ルーマニアはスロヴァキアよりも物価が安い）があることにも留意しなくてはならない。

教育カリキュラムと学生の論文にみる全体として学部教育の傾向は、スラヴであるか西側である

かに関係なく近隣地域との関係性が重視されているといえる。

IV. 結 論

—自文化を表象する政治性を超えて—

このように現代のスロヴァキアの文化人類学は自文化の探求と表象をテーマに複数の側面を持つ。その中で、注目されてきたテーマとしてスロヴァキアにおける他者との関係性が挙げられる。もともと、ゆるやかな類似性が続くスラヴの民族同士に明確な差異の境界線を引くのは難しいうえに、民族的には異なる近隣のハンガリー、ルーマニアとはオーストリア＝ハンガリー時代からの多くの移民を通しての文化的な接触があった¹⁴⁾。このような常に異なる文化が接する場では何らかの影響を互いに与え合ってきたため、さらに文化同士のグレーゾーンは広がる。過去においては、スロヴァキアの文化人類学は「純粋な」スロヴァキア性を求めたが、それには限界があり、これらの曖昧な他者との関係性の中に自己を位置付けることも必要とされるようになった。

その一方で、自文化という概念も一枚岩ではない。自文化であっても人類学者の住む都市と調査地の村落では、中心と周縁の格差が存在する。この場合の文化人類学者は自文化のエキスパートではあっても正確な意味で文化の担い手ではなく、特定のコンテキストのなかで文化を表象あるいは代弁する役割を果たしている。スロヴァキアにおいて民俗学、民族学および文化人類学とその変遷は政治的な文脈を含んできた。もちろんそれは旧東欧圏では多少なりとも他の学問にも共通する特性ではあるが、18世紀のナショナリズム運動に始まり、社会主義時代は政治的な統制、民主化後のその反動など、各時代の政治的な影響を大きく受けている。そもそも文化という要素自体、人々の生活に密着したものであり、社会に大きく関わっているため、文化人類学が社会の大きな流れの変化の影響を受けることは避けられない。

自文化の研究も欧米人類学と同じように政治的なコンテキストに絡みとられており、欧米文化人類学が植民地主義的であるなら、自文化を研究する文化人類学は民族主義的という批判も完全に否定することはできない。またそれは既に自覚されている問題でもある。しかし、政治的だという批

判は、逆にいえば文化人類学が現在形の問題を追ってきたことを示す。現在形の問題を追うためには、「自己」と「他者」の記述の差に敏感である必要がある。政治性から抜け出す意味も含めて、「自己」であるか「他者」であるかが問われない、開かれた文化研究を目指すことが文化人類学の視野を開くと考えられる。その際、非欧米の文化人類学が欧米の文化人類学を追従する意味でなく、欧米人類学も自民族を研究する文化人類学もディシプリンを共有し、欧米—非欧米、他者—自己にとらわれない文化研究の土台として、非欧米で培われてきた文化人類学の蓄積が発言権を持つと考えられる。

注

- 1) スロヴァキアの文化人類学事典によると、民族学は「文化、人々の文明化、文化間関係の歴史に関する研究」でドイツのディシプリンの影響を受け、文化人類学は「人々の社会やコミュニティの文化についての、歴史のおよび同時代的視点から比較研究」でありアメリカのディシプリンの影響を受けたとされている [Botík, Slavkovský 1995: 129, 290]。
 - 2) 以後文中における民族、民俗の使い分けは、スロヴァキアにおけるスロヴァキア語での使い分けに即する。
 - 3) ただし、社会主義時代から、学術雑誌や書籍を通して西ヨーロッパの人類学研究に触れることは可能であった。ドイツ語の書籍やスカンジナビア諸国発行の英語で書かれた研究雑誌は社会主義時代から図書館などに購入されていた。
 - 4) このアンケートの中心となる項目は3つあり、方法論的、哲学的な根本の変化に関連する新しい研究テーマについて、今後のスロヴァキア民俗誌のテーマおよびその分析の水準について、かつてはタブーであったテーマや調査が必要な問題の今後の調査計画についてそれぞれ質問されており、解答は自由記述式である [Leščák 1991]。
 - 5) こうした傾向は「フォークロア主義」folklorismと呼ばれている。その具体例として以下の事例が挙げられる。教授がつい最近受け取った結婚式の招待状を学生に見せ、「この招待状をつくったのはどんな夫婦だと思いますか?」「民族舞踊団員か、人類学者。」「そのとおり。民族舞踊団員の結婚式です」その文面は現在のスロヴァキア若い夫婦はまず使わな
- 6) コメニウス大学哲学部民族学科2003年度冬学期「フォークロリズム・フォークロリゼーション」の授業にて)
 - 6) コメニウス大学哲学部民族学科2003年度夏学期「調査方法論」の授業にて(2004/03/18)およびオーラルヒストリーのワークショップ(コメニウス大学哲学部歴史学科主催)における人類学者の発言より(2004/03/17)
 - 7) この雑誌は非スラヴ語圏へ研究成果を発表するため、ドイツ語、フランス語、英語などの非スラヴ語で論文が掲載された。
 - 8) ただし、1993年にスロヴァキア政府が経済的な事情からスロヴァキアの文化に関する研究を優先して援助することを決定したため、この雑誌は「Ethnologia Slovaca et Slavica」と改称しスロヴァキアを中心とした研究雑誌となった。
 - 9) またブルガリア語とスロヴェニア語は、同じスラヴ語であるが、語彙や細かい文法規則が異なるため、スロヴァキア人にとっては習わずに理解するのは難しい言語である。また、ポーランド語はスラヴ研究の蓄積が豊富であるため、研究上有用な言語である。
 - 10) チェコ語はスロヴァキア語と違うとされているので、ここでは外国語として扱う。ただし、多くのスロヴァキア人は、チェコ語の書籍、テレビ、映画の字幕等に触れる機会が多いので、ほぼ問題なくチェコ語を理解できる。スロヴァキア語には翻訳されていないがチェコ語には翻訳されている文献は多い。
 - 11) ドイツ語とポーランド語が読むことができれば理想的だとされているが、実際にそれが可能な学生は多くはない。
 - 12) 現時点でスロヴァキアの大学教員は、文化人類学に関してはスロヴァキアで博士号を取得した者がほとんどである。博士課程は3年制で、コメニウス大学文化人類学科には、研究者養成のコースと、学芸員など既に仕事をもっている人々がキャリアアップのために博士号取得しようとするケースに対応するコースの2種類ある。前者は毎年1、2名のみ入学許可され、学部生の基礎科目の授業を受け持ったり、調査実習の準備をしったりなど助手的な仕事をこなしつつ、博士論文を執筆する。後者も自分の仕事と並行して論文を執筆するが、それは大学関係の仕事に限らない。文化人類学のアカデミーも博士課程の学生のみ若干名受け入れており、こちらもスタッフとして仕事をしつつ、博士論文を執筆する。在籍中にオーストリアやプラハに留学する者もいる。博士課

- 程の学生は研究動向を掴むには少数なので、本文では触れないことにした。
- 13) これについては、コメニウス大学哲学部中央図書館の所蔵図書カードに記載された1987年から2001年までの民族学科修士論文題目を参照した。
- 14) ハンガリー、ルーマニアを始めとして、旧オーストリア＝ハンガリー帝国の領域内には多くのスロヴァキア移民が存在する。また逆にスロヴァキア国内にも古くから多くのハンガリー人が居住している。
- 参考文献
- Botík, Ján Slovkosk., Peter eds. 1995 *Encyklopédia ľudovej kultúry slovenska*, VEDA, Bratislava.
- Horváthová, Emília 1995 *Úvod etnologia*, Filozofická fakulta Univerzity Komenského, Bratislava.
- Kirschbaum, Stanislav J 1995 *A History of Slovakia: the struggle for survival* Matin's press, New York.
- Klíánová, Gabriela 2002a Sociálna a kultúrna antropológia- stav, perspektívy, výučba, *Slovenský národopis* 50, pp.45-55, Bratislava.
- . 2002b Etnológia na slovensku na prahu 21. storočia: Reflexie a trendy, *Slovenský národopis* 50, pp.277-289, Bratislava.
- Krekovičová, Eva 1999 Politika o folklóre-Folklór v politike (Na príklade na Slovenska), *Slovenský národopis* 47 pp.5-18, Bratislava.
- Leščák, Milan 1991 Značiatok užtočných dialógov? *Slovenský národopis* 39, pp.67-76, Bratislava.
- Lukšová, Petra 2000 Orientalizmus alebo "Ja" etnológa a "Tí druhí" *Slovenský národopis* 48 pp. 336-339, Bratislava.
- Michálek Ján 1998 *Dejny etnografie a folkloristiky*, Filozofická fakulta Univerzity Komenského, Bratislava
- Podolák, Ján 1993 Preface, *Etnologia sloveca et slavica* 26-27, pp.7-9, Bratislava.
- Stololičná, Rastislava 1994 L'udová kultúra slovenska ako súčasť európskej kultúrnej identity: zásadné kontexty výrazu, *Slovenský národopis* 42, pp.402-412, Bratislava
- . 2000 Úvod In *Slovensko: Európske kontexty ľudovej kultúry*, Stololičná, Rastislava eds., VEDA, Bratislava.
- Šrámková, Marta 2003 Slovensná folkloristika v padesáti ročníkoch Slovenského národopis, *Slovenský národopis* 51, pp.215-228, Bratislava
- ウィルソン、A・ウィリアム 1973 [1996] 「ヘルダー、民俗学、ロマン主義的ナショナリズム」『民俗学の政治性』岩竹美加子（編訳）未来社。